

衣服と生活用品のミニチュア標本

今夏のテーマ展「初公開 布 新収蔵品」では、「裁縫雛形」のコーナーで、新潟市北区の住民から寄贈いただいた衣服と生活用品のミニチュア標本 70 点を紹介している。ミニチュア標本を裁縫雛形という。製作者は、寄贈者の祖母にあたる八藤後カノヲさん（明治 33 年（1900）生まれ）である。

この資料は、カノヲさんが、「東京裁縫女学校」（現在の東京家政大学）の高等師範科に入学し、大正 11 年（1922）に卒業するまでの 3 年の間、裁縫教育を受けて正科の時間に製作した雛形である。ミニチュアサイズではあるが、服作りの全体を経験するという教育方針のもと、実物の製作に必要な知識と技術が凝縮されている。一点一点の資料には、学校印、指導者印、そして製作者の学年・氏名と品名が墨で書き込まれている。生活に必要な服だけでなく、和装、洋装、そして改良服などがあり、当時の服の歴史が読み取れる。

カノヲさんが、
身につけたこれら
の知識と技術を生
活の中でどう生か
していたのか、情
報は決して多くな
いが、村上出身の



カノヲさんが、

画像 裁縫雛形（新潟県立歴史博物館蔵）

遥々とふるさとを離れて上京し、最先端の裁縫技術を身につけていたことをこれらの資料を通してリアルに知ることができる。是非ご鑑賞いただきたい。

（陳玲）

越後の大麻（アサ）文化を伝える資料群

大麻（アサ）はクワ科アサ属の一年草である。強く丈夫な繊維がとれるため、縄・紐・ゴザ織りのタテ糸など、強度が必要な製品に利用されてきた。信濃川中流域では、江戸時代から昭和初期にかけて栽培と加工が盛んに行われていた。当館の所蔵する藁細工品などの中にもその繊維を使用しているものがある。

今夏のテーマ展「初公開 布 新収蔵品」では、「大麻（アサ）の布」というコーナーで、越後・信濃川中流域の農家から寄贈された大麻（アサ）繊維を用いた製品と生産道具を公



画像 大麻（アサ）繊維を使ったワラジなど



画像 大麻（アサ）繊維を使ったシャツ

開している。そこには、用途に応じて加工された繊維、裁縫の際に残った端切れ、シャツ、蚊帳、レンジャク（運搬具）の素材、鼻緒に大麻（アサ）を使った藁製のワラジなど、多様な資料がある。これらは明治24年（1891）生まれの女性が製作したものである。これらには、大麻（アサ）の加工技術、生活の中での使われ方などを知る手がかりが詰まっている。越後の大麻（アサ）文化を明らかにする上で、非常に貴重な資料群である。

（陳玲）

～編集後記～

7月11日から、夏季テーマ展「初公開 布 新収蔵品」を開催しています。本通信7月号では、展覧会で出品されている布に関わる内容を2本ご紹介しています。本テーマ展では図録の制作などを予定しておりませんので、この通信でその内容の一端をお楽しみいただき、展覧会に足をお運びいただければ幸いです。展示は8月23日までです。

「れきはく通信」は、新潟県地域史研究ネットワークニュースと同報のほか、月末更新となる新潟県立歴史博物館のホームページでもご覧いただけます。

ご意見、ご要望は新潟県地域史ネットワークニュース事務局までご連絡ください。

事務局メール net@nbz.or.jp